博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　　村尾誠一

学位申請者　　金　中

論文名　　「古典和歌における夕暮の詩学―八代集を中心とする比較文学的研究―」

結論

金中氏から提出された博士学位請求論文「古典和歌における夕暮の詩学―八代集を中心とする比較文学的研究―」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、村尾誠一を主査に、副査として、古今和歌集の研究者である千葉大学助教授鈴木宏子氏、本学名誉教授で東京学芸大学教授沓掛良彦氏、学内の川口健一氏・柴田勝二氏の五名で形成された。

論文の概要

夕暮という時間が詩歌の素材として特別な重要性を持つ事に着目し、日本の古典和歌におけるその文学表現の特質の把握を試みた論である。平安・中世和歌の規範的世界である八代集における夕暮を詠む作品を具体的な対象とする。

夕暮の歌をその素材の性格から内容上五つに分け、夕暮の社会的特性に対応する「旅歌」「恋歌」、時間的特性と対応する「晦日歌」、象徴的特性と対応する「生命衰微の歌」、自然的特性に対応する「叙景歌」のそれぞれについて、その特質を開示するにふさわしい具体的な切り口を定めて考察を加えた。八代集世界において、夕暮を素材とする和歌がどのような特質を持つかを明らかにするとともに、万葉集を基盤にして、中国文学の影響により、そうした特質が生じる過程を明らかにする。さらに、中国文学と対比し、中国文学から受容されない点を示すことで、その特質を際だたせることも試みた論である。

以下、この論文を形成する各章の内容を簡単に辿る。

序章「夕暮と「夕暮の歌」」では、夕暮が、詩興をそそる特別な時間帯であることを述べた上で、日本の古典和歌における夕暮の歌の概況を示す。本論の主たる考察範囲を平安・中世和歌の典型が集約される「八代集」に定め、歌または詞書に夕暮とそれに関連する言葉が含まれ、その時間に関わる歌であることが明示される歌を悉皆的に論及対象とするという、考察範囲の規定を行う。その上で、夕暮という素材の特性に基づき考察を進め、中国文学との比較文学的な視野からの検討を重視するという方法が提示される。

第１章「夕暮と旅」では、夕暮が人恋しさを喚起するということの、典型的な文学表現である「夕暮の旅愁」の表出の問題を論じる。この主題の確立が新古今時代であることを見据えた上で、それを実証的に示し得る具体的現象として『新古今和歌集』の編纂過程において、旅歌の巻に、夕暮の歌が大幅に増補された事実を取り上げる。その増補の意図を探る形で、夕暮の旅愁の主題がその時代に確立された様子を明確な形で示す。さらに、その確立にあたっては、『万葉集』や中国文学の影響を重視し、その影響を受けやすくする背景として、旅

の歌においても実体験を超えた古典を基にした創作方法が普通になった、体験詠から題詠へという和歌史的な展開を考えるものである。

第２章「夕暮と恋」では、夕暮が人恋しさをつのらせることの、もう一つの典型的主題を担う恋歌を考察する。八代集の世界では、夕暮の恋歌が悲哀的絶望的な表現で特色をなしていることに注目し、中国文学からの影響と対比の視点からその特色を際だたせる。具体的には「払床」という中国文学の表現の受容とその対比的な偏差が、中国では初夜の喜びの表現ともなり得るこの行為を、日本では一方的に来ない恋人を待つ女の悲哀絶望の表現として受容したことに示されることから説きはじめる。さらに、「待恋」の歌の分析を通し女性の悲哀絶望の表現の横溢を示す。七夕歌における日中の男女関係や感情表出の違いにも着目する。また、男性の恋歌である「偲ぶ恋」の歌における夕暮の空への悲哀の視線を分析し、そこにも頻出する悲哀絶望感の表出の有様を実証的に提示する。

第３章「夕暮と晦日」では、夕暮が一日の終わりであることが、季節の終焉の問題と重なる三月・六月・九月・十二月の晦日の夕暮を歌う歌に注目する。夏六月については、夜に行われる六月祓という行事により夕暮の活躍の余地はない。しかし、他の季節では夕暮との関連が効果的な文学表現となり得ている様を示す。春三月については惜春の情で中国文学とも共通し、秋九月については日本において独自に見られる惜秋の主題の開拓があり、歳暮でもある冬十二月については「対鏡嘆老」の主題が白楽天を通して受容されている様を、紀貫之の文業に主として注目することで示される。

第４章「夕暮と生命」は、夕暮が生命の衰微の象徴として表現されることは文学的に普遍的な現象であるが、八代集の世界では仏典の影響による悲哀無常観の表出が濃厚であることを論じたものである。中国文学では夕暮と「生命の衰微」の関係は屈源「離騒」に淵源を持ち、老いが迫り名声を獲得できない憂慮とさらなる進取の精神に特色があることを述べ、日本ではそのことは受容されず、むしろ、『出曜経』などの仏典の影響から夕暮と死が結びつき、悲哀感無常観が濃厚であることを示す。さらに、八代集世界に頻出する、「入相の鐘」「夕露」「荼毘の煙」という死や無常に結びつく素材とともに詠まれる作品について述べる。

第５章「夕暮と秋」では、「叙景歌」として秋の夕暮の歌を問う。夕暮の自然形象を集約的に表現した「秋の夕暮」という成句が十一世紀半ばの『後拾遺集』以後に成立し、中世的な美意識の要ともなる。通説では、その成句の成立は『枕草子』の強い影響とされている。その通説に対する疑問を通して「叙景歌」の問題を考える。和歌における「秋の夕暮」の表現は悲哀寂寥感が中心であり、必ずしも自然美の称賛である『枕草子』と同じではないことから始まり、白楽天の影響が顕著な『和漢朗詠集』との相違にも触れる。結論としては、悲哀寂寥の風景としての秋の夕暮は、例えば、「ひぐらし」を素材とした歌に見えるように、古今集以来中国文学の影響により熟成してきたテーマを受けたものであることが示される。つまりは、この主題の源泉は三代集世界にあったことが明らかにされる。

終章「古典和歌における夕暮の詩学」では、以上の内容を総括し、八代集の世界における夕暮の歌の中国文学からの影響の深甚さを振り返るとともに、その間の偏差にもあらためて注目する。さらに、中国文学における夕暮の静寧・閑適の表現が八代集には見られないことも指摘し論を閉じる。

付録として、以上の立論の根拠となった、八代集と万葉集における夕暮の歌の一覧である「万葉集・八代集における「夕暮の歌」一覧」を付して終わる。

審査の概要及び評価

審査委員は、論文の審査および口述試問により、金氏の論文は、対象とする作品の深い読解と観賞の体験から的確な問題を探り当て、和漢比較文学的な手法を中心とした妥当な方法に基づき、十全に調査を行い、文献上の証拠を整え、先行研究の参照も十分であり、魅力的な結論に達した優れた文学研究であることを確認した。現在の和歌文学・和漢比較文学研究の水準からも十分な学術的な成果であることは、我々の判断であるとともに、この論文を構成する多くの部分が、すでに何らかの審査を経た活字発表または口頭発表を経ていることからも知られるであろう。以下、我々の判断の主たる根拠を簡潔に示す。

１，何よりも作品の十分な読み込みと、深い鑑賞体験を原点として立論されている点。

このことは本人も自負するように、和歌を単なる資料としては扱わず、八代集について、ようやく出揃った現代の学問からの注釈を参照し、また可能な限り古注をも参照し、深く読み込むことがすべての論述の起点となっている。このことは、論文中の作品への言及の中で十分に生かされている。

２，八代集の文学世界を把握する上で「夕暮」という探求主題が極めて有効である点。

和歌文学の研究では、八代集というまとまりの中で、その素材（例えば桜・時鳥・秋風などのような）の詠作史をたどるという研究はよくなされ、場合によっては陳腐化しているともいえる。金氏の研究も一見するとそれらに埋没するかに見えるが、「夕暮」という主題は一線を画す選択であり、従来の研究とは全く質を異にする、八代集の文学世界の特質を的確に照らし出す研究となり得ている。何よりも照らし出し得る範囲が八代集の世界のほとんど全体に及び、豊饒な成果として結実している。

３，具体的な研究として成り立つための視点が的確に選択されている点。

八代集における夕暮の悉皆的な研究という、漠然となりがちな主題探求であるが、各章において、論を深めて行くための明確な論点が具体的な問題という形で絞り込まれている。具体的には論文の概要で示したが、絞り込みの的確さにより、説得力のある形で論が展開し、実証的な吟味を経た上で、結論が導かれている。

４，審美的・観賞的な視点に立ちながらも、できるだけ文献上の証拠により実証して行こうとする姿勢を貫く点。

特に、中国文学からの影響や対比について、膨大な中国詩が文献上の証拠として引用される。審査の過程ではその引用が恣意的ではないかとの指摘もあったが、口述試問により、それが平安時代の日本において歌人の読書対象として想定される、十分吟味された文献からの引用であることが明らかにされた。

５，中国文学からの影響を主として論じる従来の比較文学的な方法から、さらに進展させ、両者の相違を問題にする視点にまで踏み込んでいる点。

和漢比較文学的な手法も、すでに日常的な研究手段となっている。しかし金氏の場合、影響の元である中国詩の全体像を常に念頭に置き、対比的な視野を持ちこむことで、中国詩との差異にも注目し、今までにない和歌の特色の中国詩との対比的論述を可能にしている。このことは、和歌に見られる特色を中国文学の影響に還元しようとする従来の同種の研究と一線を画する点である。

６，八代集において、夕暮という文学的な素材がどのように詩的世界として表現されている

かをめぐって、悉皆的な研究が実現している点。
　総括的な結論は、八代集世界における夕暮の詩的把握が、悲哀感を主に、絶望的・寂寥的・無常的な性格を持つものであるということになる。この事自体を取り上げるならば特別な新味はないわけであるが、そのことを探求する過程で明らかになる文学的な課題は極めて多岐にわたり、それを含めた上での結論である以上、豊饒な成果と言わなくてはならない。
７，八代集世界の形成・展開史が説得的に描き出されている点。
　万葉集の世界を基層に、中国文学の深甚な影響で八代集的な世界が形成される過程が、説得的に示されている。それは、八代集の内部における展開についての説明でもあり、八代集的な世界の形成というより大きな問題の、絞られたポイントからの説明可能な視野の提示という文学史探究上の重要な成果となり得ている。
８，和歌の解釈についても多くの新見が示されている点。
　主として、今まで指摘されることがなかった中国文学の影響を明らかにすることで、新たな解釈の可能性が示されている。

　以上の点は、日本古典和歌の研究の進展に寄与するとともに、和漢（日中）比較文学の研究の進展にも寄与するものと認められるであろう。
　なお、申請者が日本語を母語としない留学生であることを考えれば、これだけの和歌作品を読みこなし、自在に論じること自体がすでに驚異と言う他はないのだが、そうした評価とは全く別の地平にある論文であることは、上記で明らかであろう。蛇足ながら付言しておく。

　さて、言うまでもないことだが、この論文にも問題点はある。以下問題とされる主な点についても簡単に述べておく。

１，作品の精読を基本とする態度を貫く以上は無謀な要求かもしれないが、八代集の周辺のより広範な和歌世界にも、もう少し目を配って欲しかった。時に二十一代集という範囲での言及もあるが、やや視野が限定される印象は否めない。例えば平安時代の私家集の世界にはこの主題をより際立たせる作品も存在する。また、中世の和歌表現世界には、夕暮ということでもそれ以前にはない極めて質の高い達成が見られる。
２，中国文学からの影響を論じる場合、影響を与えたであろう作品を列挙する形で論述が進んでしまい、その可否の判断が読み手に任されてしまっている部分が少なくない。もう少し親切な説明が必要であろう。また、先にも記したように、中国文学作品の指摘が恣意的な選択によるのではないかという疑問も生じさせてしまう。
３，恋歌の分析にあたっては、現在進行中のジェンダー論的な研究の成果が、もう少し取り入れられてもよかったのではないか。
４，晦日に関する論述は、何点かの既発表論文を複合して章を構成したためか、全体の構想が緊密ではなく、それぞれ注目すべき指摘がありながらも、全体的な意図を捉えるのにやや苦労を強いる論述となっている。
５，第五章の付論「「西山夕陽」考 」を最も顕著な事例に、やや説得力を欠く新説の提示が見られる。自己の観賞体験を堅持しようとする姿勢によるのだが、場合によっては別の方向からの検討による相対化も必要であろう。

６，作品の読みを原点に論が構築される故ではあるが、個別的な問題が、必要以上に普遍化される傾向も見られ、注意を要するであろう。全体の論旨を捻じ曲げるような深刻なものではないのだが、時に疑問を残させる場合もある。
７，表現を支える文化史的な背景についての説明がもっとあってもよいのではないか。特に民俗学的な観点からの考察も必要であり、そうした考察を必要とする主題も和歌作品の中には見られると思われる。
８，日中の文学の相違を述べる場合に、日本と中国との風土上の異なりについても、視野を広める必要はないのか。特に夕暮という現象の実感は風土的な差異が大きいと思われる。
９，全体の章立てについて、意図は明確に示されている（具体的なものから抽象的なものへ、個別的なものから包括的なものへ）わけだが、もう少し歴史的な配慮を重視した、異なった構成法も可能ではなかったか。

なお、上記以外にも口述試問では、「叙景」というタームをめぐる問題、「仏教」に関する認識の問題、歌人の無常認識と年齢の問題、女流歌人の漢詩文教養の問題などが質疑された。また、論文の文章について、やや平板な叙述が目につく箇所があり、より洗練された表現を必要とするのではないかという指摘もなされた。

上記の問題に対する口述試問での受け答えも適切になされ、論の不足部分に関する自覚も十分なものであった。問題点はそれぞれ重要な反省点ではあるが、成し遂げられた成果の学術性を否定するものでないことは言うまでもない。よって、審査委員会では全員一致して最初に述べた結論に達した次第である。